

THE YMCA

日本YMCA基本原則

私たちが日本のYMCAは、イエス・キリストにおいて示された愛と奉仕の生き方に学びつつ世界のYMCAとのつながりのなかで、次の使命を担います。

私たちは、すべての人びとが生涯をとおして全人的に成長することを願い、すべてのいのちをかけがえのないものとして守り育てます。

私たちは、一人ひとりの人権を守り、正義と公正を求め、喜びを共にし痛みを分かちあう社会をめざします。

私たちは、アジア・太平洋地域の人びとへの歴史的責任を認識しつつ、世界の人びとと共に平和の実現に努めます。

2015年7月1日発行(毎月1日発行)
1947年10月27日 第三種郵便物認可
本体価格45円(外税)(送料62円)
発行/公益財団法人 日本YMCA同盟
〒160-0003 東京都新宿区本町町7
TEL: 03-5367-6640 FAX: 03-5367-6641
URL: <http://www.ymcajapan.org/>
発行人/鳥田 茂 編集人/山根 一般
印刷/あかつき印刷株式会社

「アクアティック」 ～この素晴らしい水の世界

一般社団法人 日本知的障害者水泳連盟 会長
公益財団法人 日本水泳連盟 前会長

佐野 和夫



私の水泳に対する取り組み姿勢の根底には、母校である慶應義塾塾長(1933～47年)であった経済学者・小泉信三氏の【スポーツが与える三つの宝】という遺訓があります。文武両道を奨励した福澤諭吉先生の教えをベースに、第一は「練習練習の体験」、第二は「フェアプレーの精神」、そして第三が「友は人生の宝である」であります。これらにはYMCAスポーツのフィロソフィーと共通するものがあります。

私とYMCAとのお付き合いをひも解くと、かれこれ60年余り、中学時代にまでさかのぼります。当時、兵庫県内で住まいを次々と移していた私は、夏休みには香炉園海水浴場、芦屋海水浴場、甲子園プールなどを中心にあちこちで泳いでいました。

そしてさらに未知の水泳経験を求めて、瀬戸内・小豆島での神戸YMCA余島キャンプのプログラムに参加したのです。この自然豊かなキャンプサイトでも、水泳を中心にキャンプ生活を楽しみ、そして素晴らしい人物、武田建リーダー(元関西学院大学総長・アメリカンフットボール指導者)と出会いました。

YMCAのキャンプ生活を経験し、リーダーのスポーツ実践論の影響を受けた私は、高校入学と同時に居を移した東京で、東京YMCA長期少年キャンプ「野尻学荘」に飛び込んだのです。ここでは水泳プログラムを中心に野尻学荘ボーイズとして、また学荘リーダーとして大いに自然を満喫しました。その中で、水泳に真剣に挑戦すること

で、アクアティックスポーツの真の価値に気付かされたように思います。水上活動が多い野尻キャンプや海泳ぎをする観音崎キャンプに加え、神田の東京YMCAには「緑泳会」「少年体育」「朗泳会」など室内プールを利用した体育館プログラムもあり、高校生だった私は、YMCAならではのバラエティ豊かなアクアティックプログラムで、水の世界を体験していたのです。

大学時代は水泳部に在籍し、慶大工学部小金井キャンパスの近くにある私営プールを本拠とする傍ら、異なる練習環境を求めて、高校時代から利用した東京YMCAのプールにも通いました。YMCAのプールは当時、東大第二食堂の地下プールとあわせて、冬季の水中練習のメッカでもあったのです。

思い起こせば、初めてYMCAを知った中学時代から一貫して、私は水の世界、すなわち「アクアティックプログラム」と歩みを共にしてきました。

水の世界には、無限の夢が広がると常々感じています。【スポーツが与える三つの宝】は、水の世界-YMCAのアクアティックスポーツや知的障害者水泳プログラムに、現在も生かされています。「練習を重ねることで、無数の不可能が可能となる体験」「真のスポーツマンとして果敢に挑み、敗者となっても潔く相手を讃える体験」、そして「人生最大の幸福である、友を得る体験」という三つの宝。

水の世界は、「宝」と出合える、夢の世界でもあるのです。

REPORT

相手と向き合って心を合わせていくこと。(仏語:親和-共感的関係の意)

違和感をもって聖書を読む

日本キリスト教団
花巻教会伝道課
北海道大学YMCAシニア
鈴木 道也

聖書を読む上で大切な感覚の一つに、「違和感」があると思っています。聖書の中のある言葉を読んだ時、むしろ胸に落ちないものを感じる、という感覚です。素直な聖書の読み方とは対照的な、いわば我を張った聖書の読み方かもしれませんが、自分自身の今までの聖書の読み方というのは、そのようなものでした。一般に、聖書の読み方の「答え」とされていることを誰かに言われても、なかなか納得することができませんでした。

思えば、聖書に登場する人物たちも、あまり素直ではない(?)人びとが多いのではないのでしょうか。夜明けまで神様と格闘したヤコブ(創世記32章)や、神様に不平不満をぶつけるヨナ(ヨナ書4章)。中でも代表的な人物は、ヨブ記の主人公ヨブでしょう。ヨブ記は42章にも及ぶ長い対話の書ですが、ヨブが言葉を尽くして語っているのは「自分は納得できない」ということです。「納得できない」というこのヨブの主張が、ヨブ記の面白いところです。ヨブが主体性をもって発した言葉もまた、大切なものとして記され、物語の中心部を形づくっているのです。

このヨブ記を最近読み直してみても私が感

じたのは、ヨブが「納得できない」として問い続けたのは「人間の尊厳」に関する事柄であったということです。尊厳がないがしろにされていることへの叫びを、ヨブは叫んでいた。人間が軽んじられている、大切にされていない現実をヨブは訴えていたのです。

私自身、今まで自分が聖書を読む上で違和感を覚えていたのは、この人間の尊厳に関わる事柄であったように思います。聖書は一体私たち人間の尊厳をどう捉えているのか、それが分かりませんでした。聖書の中には、人間を「軽んじている」言葉もあるように思われたからです。

私はあらためて、イエス・キリストの福音を思いました。神のひとり子イエス・キリストは、私たち人間に尊厳の光を取り戻すためにこそ来てくださった。そう気付かされた時、私は長い間抱き続けてきた「違和感」がほどこかれ、「祝福」へと変えられていくのを感じました。神様からいただいた尊厳を回復する力こそが、イエス・キリストの福音の力です。

この福音の力を信頼して、今日も「違和感」をもって聖書を読もうと思います。

「自分のいのちを守り、みんなのいのちを大切に」

全国YMCAウォーターセーフティーキャンペーン

井藤 直人(横浜YMCAスタッフ)

YMCAアクアティックプログラムには、「安全思想の理解と水上安全技能を習得する〜神様から与えられたかけがえのない「生命」を守り育てるため、水難事故を未然に防ぐ技能の習得と、これらを通じて安全思想の理解と啓蒙を図る〜」という目的(願い)があります。

その目的を具現化するための活動として、YMCAでは毎年、ウォーターセーフティーキャンペーンを全国で展開し、各YMCAの近隣の学校などで、「着衣泳講習会」「心肺蘇生法講習会」「みんな泳げる25mチャレンジ」「ウォーターセーフティーハンドブックの配布」などを行っています。

2015年度のウォーターセーフティーキャンペーンのテーマは、「自分のいのちを守り、みんなのいのちを大切に」です。期間中の6月28日をYMCA水上安全の日として、プールのある全国のYMCAで「いのちを守る講習会〜水の事故からいのちを守ろう〜」を実施、その中で「着衣泳講習会」「みんな泳げる25mチャレンジ」などを行います。「着衣泳講習会」では、自分の命を守るために最も大切な「浮いて、助けを待つ」ことを伝えます。泳いで体力を消耗するのではなく、呼吸を確保して長時間浮くことができれば、助かる可能性はとも高くなります。また「みんな泳げる25mチャレンジ」では、泳ぎが初めて

だったり、苦手だったりしても溺れないように、子どもたちに泳ぎ方のコツを指導します。

私たちがこのような具体的活動を通して、キャンペーンで伝えていることは主に、①水の事故を未然に防ぐ(水の事故に遭わない)ための注意点、②溺れている人を発見した時の対処法(大きい声で助けを呼ぶ、自分が水の中に入って助けようとすることは絶対にしない)、③万一、自分が水の事故に遭ってしまった時の対処法(着衣泳など)、です。

自分の命は自分で守るといこと。それは、自分の命に責任を持ち、考え行動することを意味します。プールや川、海で子どもたちの命を守るために、YMCAのアクアティックは、水の安全プログラムの取り組みを継続していきます。



「着衣泳講習会」ベットの浮き輪がわりに、できるだけ長く浮いてみよう!

※写真提供: 熊本YMCA



福山YMCAのリーダーと平岡さん。ここから子どもたちの笑顔が生まれる

子どもたちは水の中で、陸上では見せない表情をたくさん見せます。遊んでいても泳いでいても笑顔が絶えることはありません。まるで、「水の魔法」にでもかかったかのように子どもたちははしゃぎ回ります。この無邪気な気持ちのまま、スイミングを続けていけるよう導くのがYMCAのアクアティックリーダーであり、同時にリーダーには時代にあった子どもたちとの接し方を考える冷静さと、未来を思いやる熱い思いが必要で

また、YMCAのリーダーには、伝えることができる、だけでなく、聞くこともできる。リーダーになってほしいと願います。子どもの目を傾け、保護者の声も聞き、そして仲間(リーダー)の話を聞くリーダーであってほしいのです。聞くことでコミュニケーションの輪は広がり、リーダーの役割の一つである、人と人をつなげる、そして、命と命をつなげる、ことができるのだと信じています。

アクアティックリーダーへ

「水のコミュニケーション」で、子どもたちを笑顔に

平岡正春(広島YMCAスタッフ)

京都YMCAのプールに通っていた私は、子どもも水泳も大好きなので、すぐにリーダーになりたいと思うようになりました。最初はアシスタントとして、そして現在では一人で小学生や中学生の指導を担当しています。

私はプールやプールサイドで子どもたちに、水泳の楽しさや技術はもちろんのこと、その月の月間目標について理解を促すようにしています。月間目標はおともたちの名前をおぼえよ(おぼえよ)「あいつをしよう」「せいせい」とんをしよう(おぼえよ)など、YMCAの外でも生かせることばかりです。子どもたちには月間目標を通して、人との関わり方や社会的な振る舞いを身に付けてほしいと願っています。

京都YMCAでは半年間を通じて同じグループで練習するため、「リーダー」と子ども「子ども同士」の人間関係をしっかりと築くことができます。また、半年間同じグループで指導している、初めは緊張していた子どもたちが、だんだんと自分のことや学校のことを話してくれるようになります。そんな時は、子どもたちが心を開いてくれているように感じうれしくなります。さらに、前の月間目標を継続している子どもを見ると、少しずつ成長していることが実感でき、やはりうれしくなります。そして何よりも、子どもたちが元気にプールに来て、楽しんで水泳をしていることが、私の一番の喜びです。



元気に泳ぐ子どもと「さっちゃん」リーダー。これが一番の喜びの時!

アクアティックリーダーから

私の一番の喜び

堤咲乃(京都YMCA さっちゃんリーダー)

いのちを守り育てるために

YMCAのアクアティックが目指すもの

YMCAのアクアティックプログラムでは、子どもたちが初めて水に顔をつける時、水に体を浮かせてみる時、そばにはいつもリーダーと友達があります。みんなに支えられ励まされていくうちに、水への怖さがなくなり、水の中に入る楽しさを知り、そして泳げるようになる喜びを全身で感じていきます。子どもたちは水の中で喜びや自信を得ながら、時に水には強大な力があることも学びます。YMCAのアクアティックは、自分の生命も他者の生命も大切に守り、互いを生かす合い、成長していくことを目指します。

Vol.10 We All Belong to YMCA

YMCAの活動に参画するユースからの発信

- ◆活水女子大学YWCA
- ◆内容: 1923年に活水女子大学キリスト教女子青年会(YWCA)として設立。現在は、同大学の種柄二氏を顧問に、16人が所属し、ボランティアや聖書研究会などを中心に活動している。



左から2番目が田中さん

看護学部の私は、他学部・他大学の学生との交流があまりありません。そのため、学生YMCAで新しい出会いの輪がどんどん広がっていくことが、何よりも感動で何よりも楽しいです。たくさんの方と学生やシニアに出会った数だけ、自分が成長した気がします。

ちょうど1年前、活水女子大学YWCAのことを知り、活動内容も分からないままでしたが、友人と共に手探りでスタートしました。地区や全国のいろいろなプログラムに参加する中で、学生YMCAには100年以上の歴史があることを知り、「出会いこそ“学”の醍醐味だ」と語る先輩たちの姿を見てきました。

九州地区の夏期学校で水俣病について学んだ時、水銀を直接体内に摂取したために体に悪影響を受けた人だけが「被害者」なのではなく、魚を獲り生計を立てている漁師やその家族など、もっと多くの被害者がいることを初めて知りました。自分の語彙力のなさや社会問題への関心の低さにも気づきショックでしたが、こうした“学”だからこそ得られる体験から、聖書が語る「隣人」になるためにはもっと他者に目を向けなければと、自分の考えを見直す機会となりました。

今年16人になった部員たちと一緒に、これから積極的に活動に参加して、学生YMCA活動を引き継いでいきたいです。

※連絡先: 活水女子大学YMCAとして、全国・地区での連携・交流があります。 志田 ひかり(活水女子大学看護学部2年)

短い夏にも、水と親しむ

濱塚 有史(盛岡YMCAスタッフ)

岩手県宮古市は7月末まで「やませ」が吹き、低温が続きます。やっと泳げるようになったかと思うとお盆には水温が冷たくなり、海水浴シーズンはおしまいです。さらに4年前の震災で砂浜の砂が流されてしまったため、海水浴ができる場所も限られています。宮古の子どもたちは、閉伊川、太平洋といった大自然を目の前にしながらも、水に親しむ機会が圧倒的に少ないのです。

その上、市内に温水プールが1カ所しかないため、夏の間だけでも子どもたちが水に親しむことができるように、盛岡YMCA宮古ボランティアセンターでは津軽石小学校で5日間の水泳教室を開催しています。昨年は、日本赤十字看護大学の学生、YMCAのスタッフと専門学校生、リーダー、そしてワイズメンズクラブのメンバーも指導に当たりました。

参加する子どもたちは約40人。その中に、毎日片道1時間30分歩いてくる子がいました。その子はプールサイドで楽しそうに過ごさず、水の中に入ろうとはしません。最終日、水中のフラフープの輪を子どもたちが順番にくぐっていた時に、輪を持つリーダーがその子に声を掛けました。「これ、持ってみる?」。すると、彼は水の中に入り、輪を持ったのです。並ぶ子どもたちは次々に潜り、その子の持つ輪をくぐっていききました。

宮古のプールで、川や海で、私たちは水に慣れ親しむプログラムを展開しています。水に遊ぶ子どもたちが、自然に触れ、郷土を愛する青少年へと成長することが、宮古の復興につながると思うからです。



昨年8月に行われた水泳教室。まずはプールサイドでバタ足の練習!

あるがままを尊重して

穴戸 誠一(埼玉YMCAスタッフ)

埼玉YMCAの「ひまわりクラス」では、一人ひとりに合わせたサポートを必要とする小学校1年生〜中学校卒業までの子どもたちを対象に、週に1回、アクアティック活動を行っています。子どもたちはYMCAのプールが自分の生活の一部になっていて、土曜日になると「プールの日だ!」と、喜んでいてと保護者の方々からよく伺います。

このクラスでは、子どもたちの水泳レベルに応じて潜ったり泳いだり、リーダーのリズムに合わせて歩いたり、さまざまな動きを取り入れています。水泳が上達するだけでなく、まず泳ぐことの楽しさや水の中で体を動かすことの爽快感を共に感じてほしいとの願いもあるからです。そして一人ひとりに合わせた指導で長所を伸ばしながら、苦手なことと一緒に克服していきます。数年をかけて潜れるようになった、その場に1時間立っていただけの子がプール全体を歩くようになったなど、それぞれの楽しみ方でクラスに参加しながら子どもたちは少しずつ成長しています。

「ひまわりクラス」は開講して20年以上がたち、今年も元メンバーが成人式を迎えたと報告に来てくれました。「ひまわりクラス」ではこれからも、水泳を通して生命の大切さを伝え、あるがままを尊重しながら、子どもたちとかけがえのない時間を過ごしていきます。



クラスの前、水慣れの時間にリーダーとおしゃべり。最近、楽しかったことは...



1917年、東京YMCAが温水プールを開いた日本初の室内総合体育館を創設

日本初の室内温水プールはYMCAから

2017年はアクアティック100周年

花井雅男(東京YMCAスタッフ)

1917年秋、日本初の室内温水プールを備えた総合体育館が、東京YMCAによって開設されました。このプールはオールシーズン利用できるというだけでなく、「近代泳法であるクロールが紹介され、またオリンピック選手の練習も行われました。当初、プールは「泳ぐ場所」として認識されていましたが、YMCAのアクアティックプログラムは、水泳技術を磨くだけでなく、それ以外のものを展開してきました。現在参加されているのは乳幼児から高齢の方まで、泳ぐ以外に水中歩行やアピクスなど、泳げない方にもプールで運動する喜びを知っていただいています。専門のインストラクターの指導や熱心なボランティアリーダーの励ましのもと、参加者一人ひとりが自分の体をよく知り、水の中で心地よく楽しく動くことで、心と体が健康な状態に保たれています。

2017年はアクアティック100周年。この歴史の中で、YMCAのプールでは人と人が出会い、子どもたちは学びと成長を繰り返してきました。時代が変わっても、YMCAのアクアティックプログラムが変わらずに守り続けてきたのは、命を守り育てること。YMCAは次の100年も、一人ひとりの心と体の健康を支え、すべての人が命輝いて生きることが目指します。

2017年のアクアティック100周年を記念したロゴマーク

NEWS

各地の動きをご紹介します。

●「広島フラワーフェスティバル」に参加 ——広島YMCA

1975年、広島市の平和大通りにて広島東洋カープの優勝パレードが行われ、当時としては驚異的な30万人を動員しました。これがきっかけで生まれたのが広島フラワーフェスティバルです。毎年、平和大通りおよび平和記念公園周辺をメイン会場に、5月3日から5日まで開催され、動員数が3日間で160万人を超える、ゴールデンウィーク最大級のお祭りとなっています。



広島YMCA有志は、広島フラワーフェスティバル「よさこいパレード」にも出演した

地域に根ざす活動の一環として、広島YMCAもこのフェスティバルに、開始当時から参加してきました。国際交流や健康など、YMCAからアピールするものを時代によって変えながら、ブース出展やパレードを通して参加を継続しています。

この3年間は、被爆70年・終戦70年を迎える2015年に向け平和をアピールするための「折り鶴ブース」を、広島市民の皆さまにご協力いただきながら展開しています。平和への願いを込めて折られた鶴は、広島YMCAが行う国際交流としての平和プログラム（ハノーバー市やホノルル市の平和慰霊祭・広島YMCAでのユースピースセミナー）や、仙台YMCAが事務局となっている仙台平和七夕で用いられています。

フラワーフェスティバル最終日の5月5日には、広島女学院大学と協力して「原爆の子の像」建立記念式典が行われ、YMCAの折り鶴ブースで折られた千羽鶴も献納されました。

原爆慰霊碑「原爆の子の像」は、平和記念公園の一角にあります。「原爆で亡くなった子どもたちの慰霊碑を作ろう」という広島YMCAの一青年会員の呼び掛けが全国的な平和運動に発展し（1955～1958年）、1958年5月5日に像は完成しました。この運動に大きく関わったことから折り鶴の活動は始まり、戦後、広島YMCAが一貫して世界に向けて平和を発信し続ける礎にもなっています。

広島YMCA 中興 岳生

●ネパール地震の被災者支援活動報告 ——北九州YMCA

4月25日に発生したネパール大地震では8,000人以上が亡くなり、家を失くした多くの方がテント暮らしを余儀なくされています。現在ネパール出身の学生が59人在籍している北九州YMCAでも、被災地緊急支援活動として5月2日に小倉駅前にて午後2時から約2時間、街頭募金を行いました。

募金活動には、ワイズメンズクラブの方々をはじめ、教職員とネパール出身の学生、そして中国とベトナム出身の学生や、会員の方々も参加し、439,204円の募金を集めることができました。

募金活動後には、学生たちと一緒に門司港キャンドルナイトという地域のイベントに参加しました。このイベントは、震災などで亡くなった方々を追悼すると同時に、人と人の絆を再確認するために毎年催されており、今年はネパールの地震で亡くなった方々のためにも行われました。午後6時半にキャンドルの点灯式が行われ、北九州YMCAからは、留学生を含む総勢40人が参加しました。会場ではみんなで手をつないで輪を作り、ネパールの国歌を歌い、数十秒間黙とうを捧げました。会場にはYMCAの多数の在籍生や卒業生、また講師や職員も駆けつけ、学生たちと共にこの時を過ごしました。

残念ながら北九州YMCAの在籍生の中にも身近な人を失くしたり、家族や親戚の家が倒壊したりした学生がいます。ある学生は、祖父が倒壊した家の下敷きになって亡くなったことを、地震発生の日の夜に泣きながら電話してきました。また別の学生は、最初の大地震の震源地から近い地域の出身だったため、地震発生後、約2週間も家族と連絡を取ることができずにいましたが、先日「お父さんとお母さんと話をすることができました！」と報告してくれました。

学生たちの間でも、今回の地震の被害はさまざまです。私たちはこれからも、学生たちの精神的なケアに努めていかなければなりません。地震により亡くなった方々のご冥福をお祈りするとともに、まだ苦しい状況で生活をしている方々が一日も早く安らぎの時を持つことを、切に願います。

北九州YMCA 西村 和浩



キャンドルナイトで、ネパール地震で亡くなった方々に黙とうを捧げる留学生たち

●「YMCAヘルシーキッズキャンペーン」を実施 ——横浜YMCA

横浜YMCAでは、毎年4月29日より約1カ月間、「YMCAヘルシーキッズキャンペーン」を実施しています。この取り組みは2003年度より実施していますが、当初は「ヘルシーキッズDay」という1日のみのイベントでした。しかし現在では約1カ月にわたり、多くの方々に多様なプログラム体験をしていただいています。

今年のヘルシーキッズキャンペーンでは、神奈川県内の健康教育部門のある9つの拠点を中心に、プールや体育館、グラウンドで子どもたちの健やかな心と体を育むさまざまな企画を用意。期間中には約1,700人が家族と共に参加し、健康や食育について体験する楽しいひとときを過ごしました。

メインプログラムとして力を入れている取り組みに、「YMCAキッズコーディネーション」があります。子どもたちの発育や発達に合わせてカリキュラム化した運動体験を通して、リズムやバランス、反応など7つの能力を高めます。いろいろな運動を楽しみながら、子どもたちは五感で察知したものを頭で判断し、具体的に筋肉を動かすという過程をスムーズに行えるようになっていきます。

ヘルシーキッズキャンペーンでは、YMCAのリーダーが近隣の小学校にも出掛けて行きます。中でも特に人気が高いのは「キッズコーディネーション・かけっこ」です。速く走るために必要なことスタート時にどのような姿勢を取り、そこからどのように足を動かしてスピードを高めていくのかを、YMCAのリーダーが指導します。この時期は運動会の季節でもあり、多くの子どもたちの参加がありました。



ヘルシーキッズキャンペーン初日には「チアダンス体験会」も行われた

神奈川県は、文部科学省の「全国体力調査」で毎回、全国的にも低い結果が続いています。神奈川県下で子どもたちの健康づくりを担う横浜YMCAとしても、未来の社会を創造していく子どもたちの健康・体力づくりに役立てるよう、この「YMCAヘルシーキッズキャンペーン」を継続していきたいと考えます。

横浜YMCA 北田 純一

●「YMCAワールド・チャレンジ」を実施 ——神戸YMCA

2015年6月6日、YMCAは171周年を迎えました。この記念日に合わせて、毎年、世界YMCA同盟がユースエンパワメントの一環として呼び掛ける「ワールド・チャレンジ」が世界中のYMCAで開催されます。2013年のバスケットボール、2014年の170周年パースデーに続き、今年のテーマはサッカー。



YMCAダイサービス「ふっとぷりんと」の皆さんもワールド・チャレンジに参加した

「kicking goals for youth empowerment(夢に向かってシュートを打て)」でした。サッカーを通じてYMCAを知ってもらい、シュートすることを通して若者の活躍や社会的インパクトを発信していくために、世界、そして日本のYMCAではさまざまなイベントが行われました。

神戸YMCAは、加茂商事株式会社と株式会社モルテンのご協賛のもと、「サッカーでつながる」「ネパールとつながる」をテーマに各ランチでイベントを実施しました。

「サッカーでつながる」では、4～97歳のメンバー84人がシュートを決めて夢を語りました。「サッカー選手になりたい」「科学者になりたい」という将来の夢から世界平和を願うものまで、思い思いの夢を込めてシュートした様子は、WEB上で動画配信されています(動画検索ワード:Facebook「神戸YMCAユース委員会」)。

「ネパールとつながる」は、神戸YMCA学院専門学校日本語学科のネパール人学生が「4月25日に発生した地震をみんなに知ってほしい」との願いを込めて企画しました。学生がネパールの紹介ポスターを作り、参加者がネパールについて何か一つ知るごとに1点、ポスターに描かれたサッカーゴールの中に、サッカーボールのシールを貼っていくことにしました。結果、315人が参加し、ネパール人の学生にとって大きな励みとなりました。

多くの方にご賛同いただき、このような「ワールド・チャレンジ」のイベントを行えたことを感謝いたします。これからも、子どもやユースの声を世界に発信して、一人ひとりのリーダーシップが発揮できる社会を共に作っていききたいと思います。

神戸YMCA 中道 愛子